

奄美方言の小学生向け映像教材の開発とその活用法についての研究

前田達朗（東京外国語大学 国際日本研究センター 准教授）

本研究が目指したものはふたつあった。ひとつめは奄美語瀬戸内方言の教材を作成することである。さらにその過程を記録することは、今後同様の試みがなされる際の助けになるだろう。ふたつめはユネスコの「危機言語」にも指定され、伝承が危ぶまれている奄美語瀬戸内方言の記録をすることである。本報告はこれら目的の達成を検証するために、制作の意図と過程をふりかえる。なお「シマグチ」とは、奄美全域で使われる地域言語の呼称である。

研究の背景

1609年に奄美は薩摩に植民地化される。薩摩はサトウキビの単作を強制した。耕作可能地のほとんどがサトウキビに充てられ、島民の食料に大きな制限がかかる。食糧不足で餓死者も出た。薩摩時代は飢えの記憶として語られる。農民は、借財をかさね「ヤンチュー家人」と呼ばれた債務奴隷層を生んだ。明治以降も鹿児島が収奪する構造はかわらない。慢性的な余剰労働力と経済の疲弊は、大量の移民を送り出すことになる。その顕著な例は1920年代半ばを頂点とする阪神工業地帯への移動であった。こうして出稼ぎ依存型の経済構造が形作られる。移住先での被差別経験は、「方言」を使わせないことを正当化する言説、たとえば「方言しよったら朝鮮人とまちがえられっど」などとして、いまも残る。「本土復帰運動」の際にも「方言」は「正しい日本人」であることの妨げと考えられた。学校教育の現場では、「方言矯正」が行われた。組織的に大きな規模で行われたものは、国民学校令下の太平洋戦争期であった。教員自身に「標準語」の知識がなく、「方言」を禁じる方向へと傾倒していく。相互監視と罰を与えるという方法で暴力的な「方言矯正」が行われた。これらの歴史社会的背景から、「矯正すべきもの」と考えられていた奄美語は、ついに「方言」としか呼ばれることはなかった。今回フィールドとした瀬戸内町で大きく状況が変わったのは、1994年に始まった「子ども島口大会」である。学校単位で代表を送り出すことになり、各集落での活動にひとつの目標が出来た。しかし特に教材や教授法がなく、集落の人々の手作り教材などの自助努力によって活動は成り立っていた。この状況に今回の研究の出発点があった。方言学や社会言語学がその蓄積を社会に還元する方法の提案でもある。

映像教材「瀬戸内のシマグチ」の構成

5つの集落を舞台に、会話とそのテーマや文法などの重要事項の取り出しをしたもの、集落の紹介、集落に特有な文物の三部構成を基本とした。各集落編は30分前後の収録時間である。総収録時間は120分弱。DVD2枚に収めた。予めスクリプトを用意したものと自由に語ってもらうもの双方を盛り込み、すべてのシマグチを書き起こし、共通語訳をつけたテキストを添付した。また瀬戸内町出身のアーティスト3組による「島唄」と指定重要無形民俗文化財「諸鈍シバヤ」をおさめた「芸能編」と地域の子どもたちにもなじみのある「島口ラジオ体操」の瀬戸内バージョンもあわせ収録した。

制作の概要

代表者と共同研究者、瀬戸内町の伝承活動関係者、撮影編集担当者、町立図書館学芸員の計8名による編集委員会を結成し制作にあたった。原案を集落の編集委員と協議の上シマグチに翻訳し、撮影した。談話部分は書き起こしをおこなった。「子どもの興味をひくコンテンツ」を目指した。そのほか出演者として11名の協力者を得た。撮影は瀬戸内町内、大阪市、府中市で行った。

研究の成果と今後の課題

研究の目的としたもののうち、最優先課題であった「教材の作成」については、多くの協力を得ることができ、なんとか完成させた。現場での使用を想定して制作する目的については、地元編集委員と断片的な話し合いはあったが、時間的な制約で教材そのものの制作に集中せざるを得ず、まとまった話し合いができる可能性があった第二回編集会議も台風のため中止になった。教材を試用する機会を得て、そこでの意見を反映させる計画も実際にはかなわなかった。そういう意味でもこの研究は途半ばである。上記の課題をクリアするためになすべきことは、まず「使ってもらおう」ことである。現在中央公民館にシマグチのプログラムを用意するための検討に入っている。各集落の子ども向けプログラムの活性化のためにできることも同時に考える。いずれも、この「瀬戸内のシマグチ」ができあがったからこそ踏めるステップである。使いながら作り込みをしていく作業をじっくりやっていきたい。また、「瀬戸内のシマグチ」を素材としてさらに焦点をしばった「教材」を考えるための研究会をたちあげる計画である。いろいろな人の手によって使われ「揉まれ」てこそ、よりよいものに育てていくことを目指したい。3月2日に古仁屋で開催した完成披露会は、編集委員、協力者、行政・教育関係者、研究者が集まって、にぎやかなものであった。ダイジェスト版であったが、町の人々は喜んでくれた。「瀬戸内のシマグチ」の完成はひとまずの到達点で、次への出発点であるということ強く感じている。